

《醒世姻緣傳》(第30回) 訳注 (其三)

植田均、胡玉華、石亮亮、王姝茵、鐘麗華、張恩培、江冰燕、徐明月、張秋韻

本訳注の書式、文字の字形・字体の入力形式、資料等の略号は『熊本大学社会文化研究』第14号の通りである。¹⁾ 注釈は、重要と思われる語句を取り挙げ、必要に応じて重複に取り挙げることもある。

原文

他說：你不消^[1]尋人相替^[2]，你只消^[3]央^[4]你的婆^[5]。你婆^[6]曾^[6]在通州香巖寺裏念了^[7]一千卷《救苦觀音經》，雖然^[8]舉意^[9]是爲你合^[10]那狐仙^[11]念的，不曾明說^[12]，沒有疏文^[13]達到^[14]佛前，如今^[15]那一千卷經還懸^[16]在那邊；

校注

[1]不消:[連]“不必;无须,消,助动词,需要”(…するに)及ばない、…する必要がない=“不消得;勿消”。《紅樓》79:凡世上所無之事,都頑要出來。如今且~細說。

[2]相替:[動]“替代”代わる。《三國》62:因此願~,本是好意。

[3]只消:[連]“只需要;只要”…でありさえすればよい、…だけで十分だ。《水滸》42:說得是,~村口四下裏守定。

[4]央:[動]“恳求”懇願する。《岐路》13:他如今沒過的,這個閨女~我替他賣了。

[5]婆^[5]:[名]“丈夫的母亲”姑。《狐狸緣全傳》15:俗語說打破了腦袋用扇扇、醜媳婦難免見~,既作泥鳅,不怕挖眼,總在洞裏藏著,亦是無益。

[6]曾:[副]“曾经”かつて、以前に。《金瓶》94:小的~稟過奶奶來,奶奶說且教他去看。

[7]念:[動]“诵读”声に出して読む。《西遊》13:先念了淨口業的真言,又~了淨身心的神咒。

[8]雖然:[接]“表示让步”…だけれども。《兒女》9:況且父親的待我,~百般愛惜,教訓起來却是十分嚴厲。

[9]舉意:[動]“起意”心を動かす。《醒世》29:這是我心舉了一~。他怎麼就便曉得。

[10]合:[接]“和”…と。《兒女》12:一時,安太太~張太太分賓主坐下,丫鬟倒上茶來。

[11]狐仙:[名]“狐精”狐の妖怪。《醒世》17:晁夫人要與計氏合那~建醮,怎好與外人說得,只說仍要念一千卷《觀音解難經》。

[12]明說:[動]“明明白白的说明”はっきり言う。《紅樓》31:玉道:太太必不犯疑,我只~是他鬧著要去的。

[13]疏文:[名]“愿文”願文。《金瓶》57:飽搯鼠鬚筆,展開烏絲欄,寫著一篇~。

[14]達到:[動]“到达”到達する。[比較]逆序語。近世語の“達到”と“到達”は「目的地に到着する」の意味が用いられる。しかし現代共通語では“到達”は「目的地に到着する」の意味であるが、“達到”

は一般に「水準やレベルに到達する」の意味を使用する。《兒女》11:翁婿兩個一路閑談，已～東門關廟。
[15]如今:[名]“現在”(遠い過去と対比しての)今。《紅樓》78:我這～是天上的神仙來請，那裏捱得時刻呢。

[16]懸:[動]“搁置”懸かったままになっている。《紅樓》53:五間正殿前～一鬧龍填青匾，寫道是:慎終追遠。

日本語訳

「彼は次のように言うのです。『身代わりを探す必要はない。ただお姑さんに頼めばいいのだ。お姑さんは以前通州の香岩寺で一千巻《救苦観音經》を唱えた。これは最初お前と狐仙のために唱えたものだ。はっきりとは言わなかったが、仏さまに願文は到達していない。今でも一千巻の經文はそこにそのまま懸かったままになっている。』

原文

若^[1]或是^[2]《金剛經》，或是^[2]《蓮華經》，再^[3]得^[4]二千五百卷；連^[5]你應分^[6]的這五百卷《觀音經》，通共^[7]三千卷；念完了，你便^[8]好^[9]托生。說完，又再三^[10]的拜謝^[11]。晁夫人從夢中哭醒^[12]，記得^[13]真切^[14]，醒來對着丫頭們^[15]說了一會^[16]。

校注

[1]若:[接]“如果”もし…ならば。《西遊》16:～不是老孫知覺，到如今皆成灰骨矣。

[2]或是:[接]“表示选择”(複文に連用して)或は…、或は…。《紅樓》4:咱們這進京去，原是先拜望親友，～在你舅舅處，～你姨父家，他兩家的房舍極是寬敞的。

[3]再:[副]“表事情或行为继续”また、さらに。《兒女》8:～如那清官能吏，勤儉自奉，剩些廉俸；那買賣經商，辛苦販運，剩些資財；那莊農人家，耕種刨鋤，剩些衣食；也叫作有主兒的錢。

[4]得:[動]“得到”得る。《紅樓》4:馮家～了許多燒埋銀子，也就無甚話說了。

[5]連:[介]“表示包括在内”…をいれて。《金瓶》37:合席都篩上酒，～你爹也篩上，聽我這個笑話：一個道士，錢兒沒有。

[6]應分[fèn]:[名]“分内应该做的”本分として当然なすべきこと。

[7]通共:[副]“总共;一共”合計して、全てあわせて、全部で。《水滸》41:兩路救應，～有一百四五十人，都在白龍廟裏聚義。

[8]便:[副]“就”狀況の結果を表す。《兒女》8:這驢兒日行五百裏，但遇著歹人，或者異怪物事，他～咆哮不止，真真是個神物。

[9]好:[動]“便于”…するのに都合が良い。《醒世》30:借了他的人命爲由，～去打他的家私，毀他的房屋。

[10]再三:[副]“一次又一次”何度も。《二刻》26:禦史～推辭，定要傍坐，只得左右相對。

[11]拜謝:[動]“态度恭敬的致谢”お礼を申し上げる。《儒林》1:取出一匹繭紬，一包耿餅，拿過去～了秦老。

[12]哭醒:[動]“哭着醒来”泣いて目を覚ます。《紅樓》66:這裏柳湘蓮放聲大哭，不覺處夢中～，似夢非夢，睜眼看時，竟是壹座破廟，旁邊坐著一個癩腿道士捕虱。

[13]記得:[動]“记住”覚えている。《水滸》51:官人既是來聽唱，如何不～帶錢出來。

[14]真切:[形]“清楚”はっきりしている。《紅樓》25:一時下了窗子，隔著紗屨子，向外看的～。

[15]丫頭(們):[名]“婢女”小間使い。《金瓶》9:大娘子吳月娘房裡，使著兩個～，一名春梅，一名玉蕭。

[16]一會:[名]“片刻；短時間”わずかな時間。《儒林》3: 范進方纔把銀子收下，作揖謝了。又說了～，打躬作別。

日本語訳

もし或いは《金剛經》か《蓮華經》について更に二千五百卷唱えられれば、お前の五百卷の《觀音經》と合わせて、全部で三千卷になる。上げ終わったら、お前は生まれ変わることができる。』と言うのです。」言い終わると、晁夫人に対して何度も礼を言った。晁夫人は泣いて夢より目を覚ました。夢のことははっきりと覚えていて、夢のことを小間使いに向かってひとしきり話した。

原文

到^[1]黎明^[2]起來^[3]，揀^[4]了六月十三日央^[5]真空寺智虚長老揀選二十四衆^[6]有德行的^[7]眞僧，建^[8]三晝夜^[9]道場^[10]，不用^[11]別樣^[12]經，止^[13]誦^[14]《金剛》《法華》經二千卷，《觀音經》五百卷。連^[15]前次^[16]通州誦的共一千卷，三部^[17]眞經^[18]共是三千卷，超度^[19]自縊^[20]身亡^[21]兒媳^[22]計氏。

校注

[1]到:[介]“介绍动作的时间”…になって。《水滸》2: 且說兩個牌軍，買了福物，煮熟在廟，等～已牌，也不見來。

[2]黎明:[名]“拂晓”早朝、夜明け。《紅樓》83: 家人預備四乘綠轎，十餘輛大車，明兒～伺候。

[3]起來:[動]“起床”起きる。《水滸》3: 次早五更～，子父兩個先打火做飯吃罷，收拾了。

[4]揀:[動]“挑选”選ぶ。《金瓶》3: 老身卻走過去，問他借曆日，央及人～個好日期，叫個裁縫來做。

[5]央:[動]“请求; 拜托”頼む。《西遊》60: 及定性問是何人，他說是鐵扇公主～他來請牛魔王的。

[6]衆:[量]“个，多用于僧尼道人”人を教える。《平妖》7: …寺中住持老和尚法名慈雲，只一個房頭大小，到有三四～徒弟。

[7]有德行:[連]“品德高尚”徳の高い。《西遊》12: 内中選得一名～の高僧。

[8]建:[動]“设立, 举行”設置する、行う。《儒林》40: 蕭雲仙～一壇場，立起先農的牌位來，擺設了牛羊。

[9]晝夜:[名]“日夜, 指一天的时间”昼と夜、一日。《水滸》116: 卻去淨慈寺修設水陸道場七～，判施斛食，濟拔沈冥，超度眾將…。

[10]道場:[名]“和尚道士做法事的场所, 也可指法事”法事の場所あるいは法事。《金瓶》79: 到家見門首挑著紙錢，僧人做～，親朋吊喪者，不計其數。

[11]用:[動]“需要。不用, 不需要”必要である。《金瓶》14: 也不～小鍾兒，要大銀衛花鍾子。

[12]別樣:[名]“其它的; 另外的”他。《金瓶》56: 你若要～卻有，要這個到難。

[13]止:[副]“只; 仅仅; 单单”ただ。《水滸》2: 且說這王進無妻子，～有一個老母，年已六旬之上。

[14]誦:[動]“念”唱える。《西遊》13: 一一朗音高～。～畢，喫了午齋。

[15]連:[介]“连同; 加上”…と。《水滸》34: 走不到三五十步，和人～馬，顛下陷坑裡去。

[16]前次:[名]“之前; 上次”前回、この前。《儒林》6: 因湯父母～入簾，都取中了些陳貓古老鼠的文章，…。

[17]部:[量]“表示成套或成集的书籍的数量”書籍等を数える。部。《西遊》8: 三藏共計三十五～，該一萬五千一百四十四卷，乃是修真之經，正善之門。

[18]眞經:[名]“正統的佛教经卷”正統の仏典。《西遊》8: 向佛前問白: 如來有那三藏～。

[19]超度:[動]“佛教或道教中用诵经等使鬼魂脱离苦难”仏教修法の一つで済度する、施餓鬼供養をす

る。《金瓶》8:教王婆報恩寺請了六個僧，在家做水陸～武大，晚夕除靈。

[20]自縊:[動]“上吊自杀”首を吊って自殺する。《金瓶》100:自言:西門慶家人來旺妻宋氏，～身死。

[21]身亡:[動]“死亡”亡くなる。《儒林》15:挨過兩日多，那憨仙壽數已盡，斷氣～。

[22]兒媳:[名]“媳婦;儿子的妻子”息子の嫁。《醒世》12:那～原是舊族人家女兒，思量從了婆婆…。

日本語訳

夜明けになって起床すると、六月十三日に真空寺智虚長老に頼んで、二十四人の徳がある高僧を選んでいただいて、三日間の法事を行う。他の経文は必要ない。ただ《金剛經》、《法華經》二千卷、《觀音經》五百卷を唱える。前回の通州で唱えた千巻と共に、三つの経文で三千巻である。これを以って首を吊って自殺した息子の嫁である計氏を済度することにした。

原文

先送二兩銀子做寫法^[1]，差^[2]了晁書前去^[3]。晁書見^[4]了智虚和尚，回^[5]說：銀子送到^[6]了。他說在那裏建醮^[7]，寫^[8]大奶^[9]的生日^[10]合死的日子^[11]合領齋^[12]的名字，他好填^[13]榜^[14]寫疏^[15]。

校注

[1]寫法:[名]“请僧道诵经或做法事的定钱”手付け金。《金瓶》65:一面教陳經濟寫帖子，又多封了五兩銀子～，教他早請黃真人，…。

[2]差:[動]“派;遣”使う。《紅樓》22:忽然人報，娘娘～人送出一個燈謎兒，命你們大家去猜，…。

[3]前去:[動]“去;前往”行く。《水滸》4:一面使莊客～通報。

[4]見:[動]“会见;见面”会う。《金瓶》13:這西門慶留心已久，雖故莊上～了一面，不曾細翫其詳。

[5]回:[動]“回话”返事する。《金瓶》20:半日，玳安出來～說:六娘道，免了罷。

[6]送到:[動]“送达”届ける。《水滸》28:那來的人把武松一帶，帶～點視廳前。

[7]建醮:[連]“僧道设法坛做法事”法事を行う。《金瓶》39:西門慶會中，常在～，每生辰節令，疏禮不缺。

[8]寫:[動]“书写”書く、書いて教える。《水滸》3:出賞錢一千貫，～了魯達的年甲貫址，畫了他的模樣，…。

[9]大奶^匕:[名]“对有地位的人家的大儿媳的尊称”長男のお嫁さん。《紅樓》10:據我看這脈息:～是個心性高強聰明不過的人;聰明忒過，…。

[10]八字:[名]“生日”生年月日と時刻。《水滸》100:便問了王慶的年庚～，辭別去了。

[11]日子:[名]“日期，这里指死人的忌日”日付、ここでは命日、忌日を指す。《金瓶》58:伯爵就說:哥，恭喜!今日華誕的～貨船到，決增十倍之利，喜上加喜。

[12]領齋:[連]“为祭祀死者而施斋”死者のため齋戒する、お齋(齋)を頂く。《醒世》100:胡無翳選了十二眾有戒行的高僧，自己～，建七晝夜完經道場，…。

[13]填:[動]“填写”書き入れる。《儒林》3:又把魏好古的卷子取過來，～了第二十名。

[14]榜:[名]“榜文，张贴出来的公告或者名单”立て札、公示。《水滸》43:朱貴指著李逵道:你好大膽。那～上明明寫著賞一萬貫錢捉宋江，…。

[15]疏:[名]“疏文”願文。《儒林》4:前日替這裏作了一個薦亡的～，我拿了給人看，說是倒別了三個字。

日本語訳

まず、二両の銀子を前金として払った。晁書を遣って、智虚長老に会いに行かせた。晁書は智虚長老に会い、家に戻ってくると、「銀子はお届けしました」と晁夫人に返事した。「また、智虚和尚は、

法事はどこでなされますか、若奥様の生年月日と命日及び施主の名前をお教えてください。それで立て札と願文を書くのです、と申されました」と言った。

原文

晁夫人道：你看我混帳^[1]，我都没想到這裏。我只記的^[2]他生日^[3]是二月十一日，不知甚麼時^[4]，記^[5]不真^[6]了。你還得請聲^[7]你計舅來問^[8]他。主齋^[9]就是你二叔。就在寺^[10]裏打醮^[11]，偈叫^[12]三个厨子^[13]去那裏做齋。晁書道：奶ヒ不得自巳^[14]到那裏去看着些兒。

校注

- [1]混帳:[形]“愚蠢;糊涂”ばかだ、でたらめである。《儒林》17:你哥是個～人，你要到底敬重他。
 [2]記的:[動]“记得”覚えている。《醒世》92:我～往你家來時，衣裳穿不了。
 [3]生日:[名]“出生之日”誕生日。《紅樓》77:誰是和寶玉一日的～。
 [4]時:[名]“时辰”刻、一昼夜の12分の1。《水滸》64:此～約有二更時分。
 [5]記:[動]“把印象保持在腦中”記憶する。《紅樓》48:這幾日還有幾件小的，我也～不清，所以都湊在一處，就打起來了。
 [6]真:[形]“清楚;真切”はっきりしている。《紅樓》26:薛蟠道：怎麼看不～。
 [7]請聲:[連]“麻烦;拜托”お願いすることがある。お手数をかける《醒世》68:俺还到后头～狄大嫂，到那一日早到那里參佛。
 [8]問:[動]“询问”問う、尋ねる。《金瓶》30:于是連酒也吃不成，都來李瓶兒房中～他。
 [9]主齋:[連]“主持僧道或其信徒诵经拜忏、祷告祈福等活动”（僧侶が）祭事を主宰する。《恒言》12:命翰林學士蘇軾制就籙天文疏，就命軾充行禮官，～。
 [10]寺:[名]“寺庙”寺院。《水滸》14:雷橫便道：小人住的房屋，也是～裏的，本錢也是寺裏的。
 [11]打醮:[動]“道士设坛念经为人做法事”道士が壇を設け経を読む。《金瓶》39:恰好今日～，只好了你，吃的恁憨憨的來家。
 [12]叫:[動]“让”させる。《金瓶》65:～你宋老爹承差上來。
 [13]厨子:[名]“厨师”料理人。《儒林》33:～挑了酒席，借清凉山一个姚園。
 [14]自巳:[代]“自身”自分。《金瓶》53:～走進，收拾了二百三十兩銀子。

日本語訳

晁夫人は、「ありゃ、私はぼんやりしていて、そこまでは考えていなかった。彼女の誕生日が二月十一日だということを知っているだけで、時間ははっきりと覚えていない。やっぱり計兄さんと呼んできて尋ねなければならないな。そして、法事をとりしきる施主は晁梁だ。お寺の中で法事をし、三人の料理人を呼んでお齋を作ってもらおう」と言った。晁書は「大奥さまはご自分であちらへ行かれ、様子を御覧にならないのですか」と問いかけた。

原文

晁夫人道：要^[1]你們是做甚麼^[2]的。叫我往那寺裏去。你跟^[3]着二叔再合^[4]計舅去^[5]罷^[6]。晁書去將計巴拉請^[7]得來到，見^[8]了。晁夫人說道：你妹妹還不曾托生，連次^[9]託夢^[10]叫我超度^[11]他，我已定^[12]了這十三日，做个二晝夜^[13]道場^[14]。我就忘^[15]了他生^[16]的時辰^[17]。

校注

- [1]要:[動]“需要”(…するように)求める。《金瓶》21:唱門詞兒,到明日諸人不~你。
- [2](做)甚麼:[代]“这里表示憤慨、不滿或驚訝”(客語にし、または客語を修飾し)非難を表す。《官場》19:你既不去,又要這個做~。
- [3]跟:[動]“緊隨在后面;跟隨”後について行く。《醒世》96:他不穿好的是為積福,不~着人是待自己苦修。
- [4]合:[接]“和”…と。《醒世》13:邵兄弟,你攔他們一攔,我~你們同去就是了。
- [5]去:[動]“到;去往”行く。《水滸》18:販棗子~東京賣。
- [6]罷:[助]“吧”文末に用いて相談・提案・要求を表す。《紅樓》71:我說去~。他們那裏聽他的話。
- [7]請:[動]“邀請”招く、誘う。《金瓶》59:~老爹到後邊坐罷。
- [8]見:[動]“見面”会う。《水滸》12:方纔得申文書,引去~殿帥高太尉。
- [9]連次:[名]“多次”たびたび、次々と。《金瓶》69:文嫂已過一邊,~呼酒不至。
- [10]託夢:[動]“指迷信鬼神入夢并有所囑托”亡くなった親類や友人が夢に現れて頼み事をする。《醒世》3:公公二次~,甚是分明。
- [11]超度:[動]“佛、道教指死者靈魂得以脫離地獄諸苦難”濟度する、經を唱えて死者の魂を苦しみから救うこと。《紅樓》13:~前亡後化諸魂,以免亡者之罪。
- [12]定:[動]“確定”決める、決定する。《醒世》51:到了東昌,按院掛了牌,~了日子審錄。
- [13]晝夜:[名]“白日和黑夜”昼と夜。《閱微》17:鳩人移石,已幽閉一~矣。
- [14]忘:[動]“遺忘”忘れる。《紅樓》66:你又~情了,還不住口。
- [15]生:[動]“出生”生まれる。《西遊》1:我雖不是樹上~,卻是石裏長的。
- [16]時辰:[動]“旧時計時の単位”刻、一昼夜の12分の1。《紅樓》47:這一吊錢頑不了半個~,那裏頭的錢就招手兒叫他了。

日本語訳

晁夫人は、「お前達は何のためにいるのだい。私をお寺に行かせるなんて。お前が晁梁と計兄さんで一緒に行っておくれ」と言った。晁書は計巴拉を呼んできたので、計巴拉は晁夫人と面会した。晁夫人は言った。「妹さんはまだ生まれ変わっていないのよ。何度も夢に現れて、濟度してくれと言うので、この十三日に二昼夜の法事を催すと約束したのだよ。しかし、妹さんの生まれた時間を忘れてしまっただね。」

原文

計巴拉說:他是二月十一日卯時^[1]生。晁夫人道:到那日仗賴^[2]你將着^[3]小和尚到那裏領齋,就合^[4]他說罷,省得^[5]又寫造^[6]帖子^[7]。計巴拉問說:是在那裏念經^[8],不在家裏麼。晁夫人道:日子^[9]忒^[10]久^[11]了,家裏不便,就着^[12]在寺裏罷。

校注

- [1]卯時:[名]“上午五点到七点”卯の刻、午前五時から七時まで。《水滸》113:教兄弟明早~進城。
- [2]仗賴:[動]“倚仗;依靠”頼りにする。[引申]“拜托”頼む。《金瓶》33:學生不才~列位餘光,在我恩主西門大官人做夥計,三七分錢。
- [3]將(着):[動]“帶領(着)”連れ立つ。《水滸》2:董將士使個人,~書簡…。

- [4]合:[介]“与;对”…に。《紅樓》113:紫鵲到了這裏，我從沒～他說句知心的話兒。
- [5]省得:[接]“免得”(…を)しないように、(…で)すむように。《金瓶》35:咱兩個一事包了做拜錢倒好，～人取去。
- [6]寫造:[動]“写”書く。
- [7]帖子:[名]“书柬”メモ、書き付け。《儒林》32:這一副～，說也請鮑師父去坐坐。
- [8]念經:[動]“诵读经文”誦經する、経文を唱える。《西遊》14:這帽子若戴了，不用教經，就會～。
- [9]日子:[名]“天数;时间”日数。《西遊》31:你來的～已久，帶你令郎去認他外公去哩。
- [10]忒[te]:[副]“太”あまりにも、甚だしく。[比較]程度が適度を超えていることを表す、文末に“了”を伴うことが多い。《水滸》14:一者～早些，二者也要教保正知道。
- [11]久:[形]“时间长”久しい。《金瓶》47:西門慶見間壁有人，也不敢～坐。
- [12]就(着):[介]“趁着;借着”(…の)折に、ついでに。《金瓶》47:與他盤費，～他往巡按山東察院裡投下。

日本語訳

計巴拉は言った。「彼女は二月十一日卯の刻の生まれです。」晁夫人は言った。「当日は、小和尚（晁梁）を連れて寺に行って、精進料理を頂いてね。お願いしますよ。その時、和尚さんに生年月日時刻も言っておいて下さいね、もう一度改めて書かなくてすむから。」計巴拉は尋ねました。「どこで経文を唱えるのですか。家でしないのですか。」晁夫人は言った。「法事を行う時間が非常に長く、家では不便だから、寺でするつもりです。」

原文

留^[1]計巴拉吃了晌飯^[2]，辭^[3]了晁夫人去了。晁夫人叫人打单^[4]買菜，磨麪^[5]蒸^[6]饅^[7]，伺候^[8]十三日打醮。計巴拉到了十三日黎明，領^[9]着兒子小閏哥來就^[10]小和尚。

校注

- [1]留:[動]“挽留”引き留める。《西遊》67:師徒們被～住五七日，苦辭無奈，方肯放行。
- [2]晌飯:[名]“午饭”昼御飯。《醒世》8:快進家去吃了～，下下涼走。
- [3]辭:[動]“辞別;告別”別れを告げる。《水滸》44:今晚～了哥哥，明早便行。
- [4]打单:[動]“写个单子”献立表を作る。
- [5]磨麪:[動]“磨面”碾臼で粉をひく。《封神》22:家下止有～驢兒，收拾鞍轡，大王暫借此前行。
- [6]蒸:[動]“用水蒸气加热”蒸す。《儒林》27:一會出來到廚下叫廚子～點心，做湯拿進房來與太太喫。
- [7]饅^じ:[名]“馒头”中国式マントウ。[比較]:日本の饅頭とは異なり、中に餡、具などは入っていない。《恒言》34:把錢去市心裡買～點心，並不見有一些驚慌之意。
- [8]伺候:[動]“准备”準備する。《金瓶》7:婦人在房中害熱，吩咐迎兒熱下水，～澡盆，要洗澡。
- [9]領:[動]“帶”連れる。《紅樓》6:若可以～見一見更好。
- [10]就:[動]“陪伴”相手をする。

日本語訳

晁夫人は計巴拉を引き留めて昼ご飯を食べさせた。彼は晁夫人に別れを告げかえって行った。晁夫人は召使いに料理の献立表を作らせ料理の材料を買いにゆかせた。また、碾臼で粉をひいてマントウを作り、十三日の法事に準備させました。計巴拉は十三日の夜明けになると、息子の小閏哥を連れて

きて小和尚の相手をさせた。

原文

晁夫人叫人往書房^[1]裏師傅^[2]跟前^[3]與^[4]小和尚給^[5]了三日假^[6]，扎括^[7]穿着細^[8]葛布^[9]道袍^[10]、涼鞋^[11]、暑襪^[12]，叫晁鳳、李成名跟着^[13]，同^[14]了計巴拉合小閩哥三个到真空寺去。

校注

[1]書房:[名]“书房;书斋”家の塾。《金瓶》35:説畢，出來到～裡坐下。

[2]師傅:[名]“对老师的称呼”先生に対する尊称。《紅樓》71:你兩個在這裏幫著兩個～替我揀佛豆兒，你們也積積壽。

[3]跟前:[名]“眼前;面前”そば、近く。《西遊》34:行者仍站在～，要偷他寶貝。

[4]與:[介]“引进劫做对象”動作の相手を表す。…と、…に。《西遊》19:今日既是你～他做了徒弟，何不早說取經之事。

[5]給:[動]“给与;准许”与える、くれる。《水滸》119:再說宋江奏請了聖旨，～假回鄉省親。

[6]假:[名]“假期”休みをとること。《金瓶》36:給～省親，得蒙皇上俞允。

[7]扎括:[動]“装扮;打扮”装う。[比較]山東方言に残る。《醒世》2:有衣裳儘著教他～，我一嗔也不嗔。

[8]細:[形]“精细的”細かい。《紅樓》42:再要頂～絹籠四個，粗絹籠四個。

[9]葛布:[名]“以葛等草纤维织成的布”葛布、葛の纖維で織った布。《水滸》102:頭帶單紗抹眉頭巾，身穿～直身。

[10]道袍:[名]“道士穿的长袍”道士が着る長衣。《儒林》11:身穿一件青布厚棉～，下踏暖鞋。

[11]涼鞋:[名]“鞋面通风的鞋子，一般是夏日所穿”夏靴、草履。

[12]暑襪:[名]“夏天穿的袜子”夏用の靴下。《西遊》9:參了菩薩，大設齋襯，喚丫鬟將僧鞋～，托於盤內。

[13]跟着:[動]“跟随”(お供として)後についていく。《醒世》50:狄希陳又拿了二百兩銀子，叫狄周～，約道秦敬字已到鋪中。

[14]同:[動]“陪同”…と一緒に。《儒林》20:你如今來得正好，作速收拾收拾，～我回去。

日本語訳

晁夫人は人を塾の先生の所に行かせ、小和尚に三日間の休みを頂けるようにした。そして、上等の葛布の道袍、夏靴、夏用の靴下を身に着け、晁鳳、李成名をお供として添わせ、計巴拉、小閩哥ら三人は一緒に真空寺に行った。

原文

那和尚們將已到齊^[1]，都穿了袈裟^[2]，將待^[3]上壇^[4]。三个齋主^[5]到了，拈香^[6]參佛^[7]，又與衆僧見過了禮^[8]。和尚們登壇宣咒^[9]，動起響器^[10]，旋即^[11]擺^[12]了六桌果子^[13]茶餅^[14]，請^[15]和尚吃茶^[16]過了，寫了文疏。

校注

[1]到齊:[動]“到齐”到着し揃う。みな到着する。《金瓶》20:官客在新蓋捲棚內坐的吃茶，然後～了。

[2]袈裟:[名]袈裟。《水滸》4:長老又賜法衣、～，教智深穿了。

[3]將待:[連]“将要”もうすぐ…する、まもなく…する。《金瓶》53:直至黃昏時候，各房～掌燈，金蓮躡足潛蹤。

- [4]壇:[名]“举行祭祀的坛”祭祀や儀式などを行う台。祭壇。《西遊》45:我與你都～祈雨,知雨是你的,是我的。
- [5]齋主:[名]“僧、道の施主”施主、祭主。《水滸》90:願今～身心安樂,壽算延長,日轉千階。
- [6]拈香:[動]“撮香焚燒以敬神佛”(神や仏に)線香をあげる、焼香する。《紅樓》29:賈母親去～,正是初一日乃月之首日。
- [7]糸佛:[動]“拜佛”仏像を拜む。《醒世》63:三官廟陳道士一個男人家,我怎好自己～拜懺的。
- [8]見禮:[動]“行礼”会って・対面して挨拶を交わす。《金瓶》79:伯爵走來與眾人～,說道。
- [9]宣咒:[動]“念经”読経する。
- [10]響器:[名]“锣鼓之类的打击乐器”鉢。《醒世》64:關閉了庵門,故意把～敲動,鼓鈸齊鳴,梵咒經聲。
- [11]旋即:[副]“隨即;立即”すぐに、ただちに。《儒林》39:忙叫五百人～砍伐林竹,編成筏子。
- [12]擺:[動]“陈列”物を並べる、配置する。《水滸》7:～下些酒食,卻叫陸謙去請林冲出來吃酒。
- [13]果子:[名]“点心”お菓子。《紅樓》29:給他些錢買～吃,別叫人難為了他。
- [14]茶餅:[名]“茶餅”硬いお茶。《金瓶》7:衣服頭面、四季袍兒、羹果～、布絹細綿,約有二十餘擔。《金瓶》91:縣中備辦十六盤羹果～,一付金絲冠兒。《金瓶》97:十六盤羹果～,兩盤上頭面,二盤珠翠。《醒世》16:晁夫人又差晁書押了四盒～,四盒點心。《醒世》21:今日不曾請他,他却買了兩盒～,打了一個銀鈴。《醒世》26:藏在袖裏的～,辛苦一日,三四日還快活不了。《醒世》30:一日三頓上齋兩次～;還有親眷家去點茶的。
- [15]請:[動]“招待”招待する。《儒林》5:今日一者～喫酒;二者奶奶要同舅爺們談談。
- [16]吃茶:[動]“喝茶”お茶を飲む。《紅樓》82:媽媽,你乏了,坐坐吃～罷。

日本語訳

僧侶たちは既に揃っていて、みんな袈裟を着、祭壇に上がろうとしていた。三人の施主がやってきて、香を焚き、仏様を拜んだ。また、僧侶たちと挨拶を交わした。僧侶たちは祭壇に上がり、読経し、鏡鉢の音が響き始めた。読経が終わると、晁夫人は六卓にお菓子、(硬い)お茶を用意させ、僧侶たちにお茶を勧めた。そして、長老に願文を書いて頂いた。

原文

上寫:南瞻部洲^[1]大明國^[2]山東布政使司^[3]東昌府^[4]武城縣^[5]真空寺秉教^[6]法事^[7]沙門^[6],切念^[8]人生若^[9]夢,石火^[10]以同光;時日^[11]如漚^[12],鏡花^[13]而並采^[14]。使^[15]非壽考^[16]永終^[17],謂是夭亡^[18]非命^[19]。茲者^[20]:本縣富有村無憂里五畝一甲晁門^[21]計氏,生于永樂^[22]二十一年二月十一日卯時^[23],享年^[24]二十九歲。

校注

- [1]南瞻部洲:[名]“佛教传说中四大部洲之一”<宗>仏教の經典にいわれる四大州の一つ。《西遊》62:臣僧乃～東土大唐國差來拜西方天竺國大雷音寺。
- [2]大明國:[名]“明朝”明朝人のその朝代の呼称。《醒世》91:三個都是紅頭髮的野人,不生在南瞻部洲～的人。
- [3]布政使司:[名]“明朝管理国家一级行政区财政、租税的官名”一省の財政・租税・税関の分野を管理する職。《儒林》26:他原是跟～胡偏头的女儿。
- [4]東昌府:[名]“隶属于山东省聊城市”山東省聊城市の管轄にある市轄区。《水滸》70:只見張清在宋公明面前,舉薦～一箇獸醫,復姓皇甫名端。

- [5]武城縣:[名]“位于山东德州市西部”山東省德州市に位置する県。《岐路》37:他説他老師婁進士指日上山東～上任,他去送行。
- [6]秉教沙門:[連]“出家的佛教徒的总称”<宗>仏教の戒律に従って出家して僧になった者。《西游》56:他们虽是丑陋,却也～,皈依善果。
- [7]法事:[名]“宗教法会”法要(=“佛事”)《金瓶》78:在家與李瓶兒念百日經,十回度人,整做～,大吹大打,倡道行香。
- [8]切念<=窃念>:[動]“表示个人意见的谦辞”秘かに…と思う。《水滸》82:～宋江、卢俊义等,素怀忠义,不施暴虐。
- [9]若:[動]“像”…のようだ。《金瓶》9:生的面～銀盆,眼如杏子,舉止溫柔,持重寡言。
- [10]石火:[名]“以石敲击,迸发出的火花,闪现极为短暂”石を打って発する光。人の命が短いことのとえ。(=电光石火)《二刻》19:电光～梦中身,白马红缨衫色新。
- [11]时日:[名]“时间”時間。《红楼》114:贱眷在后缓行,到京尚需～。
- [12]漚:[名]“泡沫”あぶく。《西游》11:百岁光阴似水流,一生事业等浮～。
- [13]鏡花:[名]“镜中花”鏡に映った花。《四溟》2:古诗妙在形容,所谓水月～,言外之言。
- [14]采:[名]“采摘”摘み取る。《儒林》34:這就是你彈琴飲酒,～蘭贈芍の風流了。
- [15]使:[動]“让;叫”…に…させる。《红楼》70:寶玉一面～人拿去打頂線,一面又取一個來放。
- [16]壽考:[名]“年寿;长寿”長寿。《红楼》89:從沒有彈琴裏彈出富貴～來的,只有彈出憂思怨亂來的。
- [17]永終:[動]“生命终结”生命の終わり。《封神》2:臣闻人君修德勤政,则万民悦服,四海景从,天禄～。
- [18]夭亡:[動]“夭折”夭折する。《金瓶》62:雖招貴夫,常有疾病,比肩不和,生子～。
- [19]非命:[名]“遭遇祸害而死亡”非業の死を遂げる。《喻世》40:将家门不幸遭变,一家父子三口死于～。
- [20]兹者:[名]“现在”<書>今、ここに。《水滸》101:～,又因强贼王庆,作乱淮西。
- [21]晁門:[名]“晁家”晁家《醒世》22:浩封宜人～郑氏同男晁梁,因先夫蒙朝廷恩典。
- [22]永樂:[名]“明成祖朱棣的年号”明の成祖(朱棣)の年号(1403-1424)。《儒林》8:自從～篡位之後,明朝就不成個天下!
- [23]卯時:[名]“上午5时至7时”卯の時、午前5時から7時まで。《红楼》64:擇於初四日～請靈柩進城,一面使人知會諸位親友。
- [24]享年:[名]“称死亡人的寿命”享年。《红楼》110:臉變笑容,竟是去了,～八十三歲。

日本語訳

そこにはこのように書かれた:南贍部洲大明国山東布政司東昌府武城県真空寺秉教法事沙門、秘かに思うに人生は夢の如く、石を打ち発した光の如く短し。時日は泡、鏡に映った花の如く簡単に摘み取らる。天寿全うせず永眠するを夭亡非命という。本県富有村無憂里晁家の計氏は、永樂二十一年二月十一日卯の刻に生まれ、享年二十九歳。

原文

因^[1]妾誣^[2]姦^[3], 義^[4]動不平之氣^[5]; 憤夫休逐^[6], 謀^[7]甘^[8]自盡^[9]之心; 于^[10]景泰^[11]三年六月初八日失記^[12]の時自經^[13]身故^[14]。誠恐^[15]沉淪^[16]夜海^[17], 未出人天^[18]; 久絶^[19]明期^[20], 尙^[21]羈^[22]鬼道^[23]。

校注

[1]因:[接]“由于”…ために。《金瓶》94:～和大娘子合不著, 打發出來。

- [2]誣:[動] “捏造事实” 曲げて言う、誣告する。《歧路》56:看官要知, 小人之~君子, 加淫欲之事。
- [3]姦:[名] “通奸” 姦通すること。《金瓶》92:只說玉樓先與他有了~, 與了他這根簪子, …。
- [4]義:[名] “名词做状语, 或理解为活用作动词。讲道义亦可” 道義に基づいて。《聊斋》3:将伯之助, ~不敢忘, 然彼赳赳, 妾实畏之。
- [5]不平之氣:[連] “愤怒” 不平な気持ち。《喻世》40:沈炼一肚子~, 忽然揎袖而起, 抢那只巨觥在手
- [6]休逐:[動] “休妻” 妻を離縁する。《金瓶》25:落後嫁與人家, 被人家說不是女兒, ~來家。
- [7]謀:[動] “打算” 図る。《平妖》23:望相公青天作主, 原不曾~死胡永兒。
- [8]甘:[動] “自願” 甘んじる。《紅樓》120:不知妙玉被劫或是~受污辱, 還是不屈而死.不知下落。
- [9]自盡:[動] “自杀” 自殺する。《紅樓》5:诗后又画一座高楼, 上有一美人悬梁~。
- [10]于:[介] “在” …に。《金瓶》1: ~巳、午、未三個時辰過崗, 其餘不許過崗。
- [11]景泰:[名] “明代宗朱祁钰的年号” 明の代宗朱祁钰の年号 (1450-1456)。《醒世》47:我記得的, ~三年十二月十六日酉時生的。
- [12]失記:[動] “失去记忆” 記憶がなくなる。《醒世》13:幼年間~本宗名姓, 被父母受錢, 不知的數, 賣與不在官樂戶施良為娼。
- [13]自經:[動] “上吊自杀” 首をくくって自殺する。《聊斋》12:一夜宿于沂, ~死, 乃瘞诸乱冢中。
- [14]身故:[動] “身亡” 人が死ぬ。《喻世》28:我张胜跟随外祖在此, 不幸外祖~, 孤寡无依。
- [15]誠恐:[動] “惧怕; 害怕” 恐れる。《儿女》13:如今报效得少了罢, ~罪名減不去。
- [16]沉淪:[動] “陷入不幸境地” 沈む。《西遊》11:積德的, 轉生富道; 惡毒的, ~鬼道。
- [17]夜海:[名] “冥界” 冥界。《大藏》81:善財游歷百餘城。未委娑婆教體清。幸是虛空無耳朵。閻浮日~潮聲。
- [18]人天:[名] “人世间” 人の世。《金瓶》66:小道謬參冠裳, 濫膺玄教, 有何德以達人天。
- [19]絶:[動] “断” 切れる。《聊斋》9:分当自此~矣, 犹幸未忘恩义, 差足自贖。
- [20]明期:[名] “人世间” 人の世。
- [21]尚:[副] “仍然” まだ。《紅樓》107:只怕他们爷儿两个也不大好, 就是这项银子~无打算。
- [22]羈:[動] “停留” とどまる。《金瓶》36:奈公事所~, 幸為寬恕。
- [23]鬼道:[名] “阴间” 冥途。《西遊》11:積德的, 轉生富道; 惡毒的, 沉淪~。

日本語訳

妾の姦誣告により、心中不平の気持ち抱き、夫の離婚して逐うを憤り、甘んじて自尽の心を図り、景泰三年六月八日、記憶なくす時刻、自縊して身亡ぶ。誠に恐る、夜海に沈淪して、未だ人間世界に出ざるを。久しく転生の期は絶え、尚鬼道に羈(罣)がる。

原文

是^[1]據^[2]同母孝^[3]兄計奇策, 夫家孝弟晁梁, 孝姪^[4]計書香, 延請^[5]本寺禪僧二十四衆, 啓建^[6]超度^[7]道場三晝夜, 虔^[8]論^[9]法華金剛經各一千卷, 觀音救苦經合景泰三年九月二十八日通州香巖寺誦^[10]過五百卷, 去一千卷, 合力^[11]投誠^[12], 仰^[13]干^[14]洪^[15]造^[16]。

校注

- [1]是:[代] “此, 这; 这个” この、ここ。《三国》114:髦曰: ~可忍也, 孰不可忍也。朕意已決, 便死何懼。
- [2]據:[動] “依靠, 依仗” よる、頼る。《金史·本卷》17:李全自都復入楚州~之, 遣總帥完顏訛可、元

帥慶山奴守盱眙，與全戰於龜山。

[3]孝:[形]“孝顺的”孝行(な)。《紅樓》111:走了半日，來至鐵檻寺安靈，所有孝男等俱應在廟伴宿，不題。

[4]姪:[名]“侄子”兄弟(世代を同じくする親戚)の息子、甥。《醒世》88:龍圖閣大學士呂蒙正是我的大爺，～兒是舉人。我家裏也有二三千金的產業。

[5]延請:[動]“請人担任工作”招聘する、お招きする。《西遊》62:當時～道士打醮，和尚看經，答天謝地。

[6]啓建:[動]“設置”設ける、設置する。《西遊》87:當時召請本處僧道，～道場，各各寫發文書，申奏三天。

[7]超度:[動]“佛、道教指使死者靈魂得以脱离地獄諸苦難”濟度する。《水滸》2:史進一面備棺槨盛殮，請僧修設好事，追齋理七，薦拔太公。又請道士建立齋醮，～升天。

[8]虔:[副]“恭敬、誠心”敬虔なる、慎んで。《警世》26:解元道:適夢中見一金甲神人，持金杵擊我，責我進香不～。

[9]論:[動]“誦讀”唱える、述べる。《狐狸》4:看官，你～延壽兒這孩子，外面雖生的不大夠本，卻是外濁內秀。

[10]誦:[動]“朗誦、念誦”読む、朗誦する。《金瓶》63:須臾過了，看看到首七，又是報恩寺十六眾上僧，朗僧官為首座，引領做水陸道場，～法華經，拜三昧水懺。

[11]合力:[動]“協力”力を合わせる。《西遊》33:眾怪道:大王，你没手段，等我們著幾個去報大大王，叫他點起本洞大小兵來，擺開陣勢，～齊心，怕他走了哪裡去。[比較]現代共通語は一般に“合作”を使う。

[12]投誠:[連]“投獻誠心”誠意を披瀝する。《西遊》56:師父放心，我等皈命～，怕甚妖怪。

[13]仰:[動]“依賴、依靠”依存する、頼る。《紅樓》107:賈政道:犯官～蒙聖恩，不加大罪，又蒙將家產給還，實在捫心惶愧。

[14]干:[動]“求取”(地位や俸禄を)求める。《金瓶》39:共列仙醮一百八十分位，仰～化覃，俯賜勾銷。

[15]洪:[形]“大，与‘小’相对”大きな、大きい。《金史·列傳》47:臣忝耳目之官，居可言之地，苟為緘默，何以仰酬～造。

[16]造:[名]“福分;幸运;造化”幸福、幸運。《金瓶》39:領家眷等，即日投誠，拜干洪～。

日本語訳

ここによって、同母の孝兄計奇策、夫の家の孝弟晁梁、孝甥計書香は、本寺の禅僧二十四衆を延請し、三昼夜にわたる濟度の道場を設け、謹んで《法華經》、《金剛經》各一千卷、また《觀音救苦經》五百卷、景泰三年九月二十八日に通州香岩寺にて唱えし五百卷と共に一千卷を誦經し、力を合わせて誠意を捧げ、天からの大きな恩恵を仰ぐものなり。

原文

錫^[1]振^[2]鬼門閔^[3]，出慈航^[4]而接引^[5]；瀟^[6]迎佛子國^[7]，將舍利^[8]以依皈^[9]。永離鬼趣^[10]之因^[11]，急就^[12]人間之樂、如牒^[13]奉行^[14]。

校注

[1]錫:[名]“錫杖、禅杖，佛教法器”錫杖、僧人所持の禅杖。《西遊》12:有一件錦襴異寶袈裟、九環～杖。還有那金緊禁三個箍兒，密密藏收，以俟後用，只將袈裟、～杖出賣。

- [2]振:[動]“敲”叩く。《水滸》34:頭角崢嶸,如銅葉~搖金色樹。
- [3]鬼門関:[名]“迷信传说中的阴世、阳间的交界处”地獄の入口。《西遊》10:忽見一座城,城門上掛著一面大牌,上寫著幽冥地府~七個大金字。
- [4]慈航:[名]“佛教用語,指以大慈悲救度眾生”仏が慈悲心で、苦海から衆生を濟度すること。《醒世》64:仰仗~泛泛,猶易援拯。敢用敬求佛力,於焉普度人天,牒文到日,如敕奉行。
- [5]接引:[動]“佛教語。佛与观世音、大势至两菩薩引导众生入西方淨土。也泛指助人度脫凡尘”仏が衆生を極樂淨土へ引導する。《金瓶》62:請引路王菩薩與他~冥途。
- [6]幡:[名]“旗帜”のぼり。さおの先に付けて垂らすように掛ける長細い形の旗。《二刻》24:或挈幢蓋,或舉旌~,和容悅色,意甚安閒。
- [7]佛子國:[名]“受佛戒者、佛門弟子的国度”菩薩と仏の弟子の国。
- [8]舍利:[名]“身骨。后也指德行较高的和尚火化后剩下的骨头。也叫舍利子”仏舍利。《西遊》62:他知你塔上珍奇,與龍王合盤做賊,先下血雨一場,後把~偷訖。
- [9]皈依:[動]“佛教語。多指虔诚信奉佛教或参加其他宗教组织”帰依する。
- [10]鬼趣:[名]“鬼界的气氛”地獄、餓鬼道。《警世》14:因你凡心不淨,中道有退悔之意,因此墮落今生,罰為貧儒,教你備嘗~,消遣色情。
- [11]因:[名]“因果报应。佛教語,指因緣和果报”仏語の因果、因縁。《醒世》100:據他方才自道,又做了朝廷的命官,這個報應却是怎生的~果。
- [12]就:[動]“靠近,接近”近づく、近寄る。《金瓶》67:伯爵拉過一張椅子來,~着火盆坐下。
- [13]牒:[名]“文书或簿册”文字を書き記す札。また、書きつけ。《醒世》64:仰仗慈航泛泛,猶易援拯。敢用敬求佛力,於焉普度人天,~文到日,如敕奉行。
- [14]奉行:[動]“遵照实行”実行する、施行する。《醒世》64:仰仗慈航泛泛,猶易援拯。敢用敬求佛力,於焉普度人天,牒文到日,如敕~。

日本語訳

錫杖を鬼門関に振るい、慈しみの舟を出し導き、幡(はた)もて仏子国に迎えられよ。舍利を以って帰依せん。永遠に餓鬼道の束縛から離れ、人間の樂を急ぎ得ん。牒に記す通り奉行せられよ。

原文

計巴拉、小和尚同^[1]晁書、晁鳳、李成名五个人輪流^[2]監守^[3]。那些和尚果^[4]也至^[5]誠^[5]的諷誦^[6]真經^[7]。一日三頓^[8]上^[9]齋,兩次茶餅,還有親卷(眷)家去^[10]點茶^[11]的,管待^[12]得^[13]那些和尚屁滾尿流^[14],喜不自勝^[15]。

校注

- [1]同:[介]“和”…と。《歧路》2:逢若道:既不往盛宅去,我~你再尋個散悶去處。
- [2]輪流:[動]“依次更替”順番に。《紅樓》63:眾人笑道:你要脫你脫,我們還要~安席呢。
- [3]監守:[動]“看管;看守”見守る。《封神》98:武王見百姓挽留,乃慰之曰:今朝歌朕已命二叔~,如朕一樣,必不令爾等失所也。
- [4]果:[副]“果然”果たして。《儒林》36:先生向日弟曾在尤資深案頭見過他的詩集,~是奇才。
- [5]至^[5]誠^[5]: [形]“极为诚恳;诚心诚意”誠意、真心。《醒世》95:老婆說出的言語,不敢不欽此欽遵,就是老婆們放出像素姐那般的臭屁,也要~捧着嗅他三日。

[6]諷誦:[動]“诵读”朗読する。《金瓶》68:到初五日早請了八眾女僧,在花園捲棚內建立道場,~《華嚴》、《金剛》經咒,禮拜《血盆》寶懺。

[7]真經:[名]“佛家的经书”佛教の經典の称。《西遊》43:那長老得性命,全虧孫大聖;取~,只靠美猴精。

[8]頓:[量]“表示吃饭、责骂、打人等动作的回数”回。《金瓶》20:一日不少我三~飯。

[9]上:[動]“提供,端上”出す、提供する。《儒林》23:奉過酒,頭一碗~的冬蟲夏草。

[10]家去:[連]“回家”家へ帰る。《水滸》7:陸虞候道:兄長,我們休~,只就樊樓內吃兩盃。

[11]點茶:[連]“沏茶”お茶をたてる。《金瓶》39:良久,吳大舅、花子由都到了,每人兩盒細茶食來~。

[12]管待:[動]“招待;款待”招待する、ご馳走する。《水滸》7:每日酒食~。

[13]得:[助]“放在动词与补语之间,表示程度”…ほど。《西遊》4:那些天馬見了他,泯耳攢蹄,倒養~肉膘肥滿。

[14]屁滾尿流:[成]“这里形容极度兴奋”嬉しくてたまらない。《金瓶》39:喜歡的道士~,臨出門謝了又謝, …。

[15]喜不自勝:[成]“抑制不住内心的喜悦而表现出来;极欢喜”喜びが隠し切れず表に現れる。《紅樓》28:寶玉見了,~,問:別人的也都是這個。

日本語訳

計巴拉、小和尚は晁書、晁鳳、李成名ら五人とともに輪番で見守った。和尚たちは極めて誠心誠意お経を唱えた。一日にお齋を三回、お茶と點心を二回出す。この他に、親族が自分の家へ帰ってお茶とお菓子を用意して持ってくる。こんなに手厚くおもてなしされて、僧侶達は嬉しくて、喜びを隠し切れない。

原文

到了第三日午後,三樣^[1]寶經^[2]將次^[3]念完^[4],收拾^[5]了新^[6]手巾^[7],新梳籠^[8],新簸箕^[9]荳帚^[10],匈候^[11]破獄^[12]的^[13]用^[13];又說要搭^[14]金橋銀橋^[15],起發^[16]了一疋黃絹,一疋白絹,還要撇鉞^[17],又起發了六尺^[18]新布。又三日要了三个燈斗^[19]。又蒸^[20]了大大的^[21]米斛^[22]麩斛,準備^[23]大放^[24]施食^[25]。這半日擠^[26]了人山人海^[27],滿^[28]的一寺^[29]看做法事^[30]。

校注

[1]樣:[量]“量词。表示物品的品类”事物を種類で数える。《金瓶》56:店裡橫著一張櫃檯,掛幾~鮮魚鵝鴨之類,到潔淨可坐。

[2]寶經:[連]“同‘真经’,对佛典的美称”貴重なお経。《醒世》16:央他念一千卷救苦難觀世音菩薩の~。

[3]將次:[副]“将要”まもなく…しようとする、やがて。《儒林》9:看看二更多天氣,兩公子~睡下,忽聽一片聲,打的河路響。

[4]念完:[連]“诵念完毕”読み終わる。《兒女》64:十三歲上就把《四書》、《五經》~,開筆作文章、作詩,都粗粗的通順。

[5]收拾:[動]“准备”用意する。《水滸》21:~了數盤菜蔬,三隻酒盞,三雙箸。

[6]新:[形]“没有用过的”新しい。《水滸》8:沒奈何只得把~鞋穿上。

[7]手巾:[名]“拭面或揩手用的巾”手ぬぐい、タオル。《金瓶》50:傅夥計恐怕他濕了帳簿,連忙取~來抹了。

[8]梳籠:[名]“梳子”くし。《金瓶》48:裏邊舖陳床帳,擺放桌椅~抵鏡粧臺之類。

- [9]簸箕:[名]“装垃圾的用具。畚箕”塵取。《紅樓》52:接著又見一個小廝帶著二三十個拿掃帚～的人進來，見了寶玉。
- [10]笤帚:[名]“一种清洁用具”（塵やごみを掃く）小き目のほうき。《金瓶》24:于是取了～來，替他掃瓜子皮兒。
- [11]伺候:[動]“伺=伺。服侍;照料”仕える、世話をする。《金瓶》79:玉簫拏盞兒～，眾人陪著吃點心下飯。
- [12]破獄:[連]“僧人为亡灵诵经来超度亡灵出地狱，是一种佛事活动”死後地獄を脱し、その苦をのがれるために行う仏教の儀式。破地獄。《醒世》30:凡是做法事，～，放斛，都是他主行。
- [13]用:[動]“使用”使う。《醒世》18:你替我們～了，就如送了我們的一般。
- [14]搭:[動]“支起;架起”組んで作る。《西遊》67:八戒莫愁，我叫他～個橋兒你看。
- [15]金橋(銀橋):[名]“做法事所用的道具”。法事を行う場所を中心に、左右に各三つの四角い机で組み立てて、その上に黄色い絹で覆うのが、金橋と言う。また、白い絹で覆うのが銀橋と言う。《西遊》11:判官喝令起去，上前引着太宗，從金橋而過。太宗又見那一邊有一座銀橋，橋上行幾個忠孝賢良之輩，公平正大之人，亦有幢幡接引。
- [16]起發:[動]“准备”用意する。《醒世》68:只是聞得白姑子～那許多銀錢。[比較]“起發”は別に“索取”「(金)を巻き上げる」意味でよく使用されている。
- [17]撒鉞:[動]“做佛事的娱乐表演”法事を行う時、シンバルを叩く。《粉妝》70:殺得叫苦連天，哀聲遍地，丟盔棄甲，拋旗～鼓，五萬兵丁，傷了一半。
- [18]尺:[量]長さの単位。1尺約0.3メートル。《金瓶》1:貪他的，斷送了堂堂六～之軀，愛他的，丟了潑天闕產業。
- [19]燈斗:[名]“祭祀用的一种器具”供物皿。《醒世》26:分的那供獻饌點心，～裡的糧食。
- [20]蒸:[動]“蒸”蒸す。《水滸》38:把一尾魚做辣湯，用酒～一尾，教酒保切鱸。
- [21]大大(的):[形]“形容詞疊用，相当于‘非常大，很大’，表示‘头’的程度超出尋常”大幅である、大々的である。《紅樓》25:你若教給我這法子，我～謝你。
- [22]斛:[名]“古代量詞”入れ物。《金瓶》61:…聽了眉頭搭過三黃鎖，腹內包藏萬～愁。
- [23]準備:[動]“准备”準備する、用意する。《紅樓》65:討他們的好，～在賈珍前上好。
- [24]大放:[動]“大发;广发”広い範圍・深い程度で…する。《金瓶》62:在房裡離地跳的有三尺高，～聲號哭。
- [25]施食:[名]“布施飲食”無縁の亡者の靈を弔って供養すること。ここでは參會見物客に振る舞われた。《醒世》30:那日剛剛放完了～，忽然脫了形，自己附話起來。
- [26]擠:[動]“挤”人込み、込み合う。《儒林》5:晚間～了一屋的人，桌上點一盞燈。
- [27]人山人海:[成]“形容人聚集得很多”人が非常にたくさん集まっていること。《平妖》31:看的人，～，越多了。
- [28]滿匕:[形]“表示充滿;實滿”満ち溢れる。《西遊》75:那小妖真個將藥酒篩了兩壺，～斟了一鍾，遞與老魔。
- [29]一寺:[連]“整个寺庙”お寺全体。《平妖》37:我當初住在甘泉寺時，～中僧眾，都知我名號。
- [30]法事:[名]“指供佛、礼忏、打醮、修齋等宗教法會、儀式”祈り・祈願・祈禱などの法事。《紅樓》102:賈赦沒法，只得請道士到園作～驅邪逐妖。

日本語訳

三日目の午後になると、三つの宝経は唱え終わろうとしていた。そして、新しい手ぬぐい、くし、ちりとりやほうきを「破地獄」のために用意し。さらに「金橋」、「銀橋」を組み立てなければならぬと言い、一匹の黄色い絹、一匹の白い絹を準備した。また、「撤鉢」をするために、六尺の新しい布を準備した。そして、この三日間の法事費用を用意した。また見物人のために大量のコメ、麵を使って施食が用意された。この半日の間、大勢の人々が寺の境内全体に溢れ返りこの法事を見物していた。

[注]

1) 分担は、1人200字～400字を担当し、校注構成メンバーの論議を経て何度も修正、最終的に植田均が調整した。したがって誤謬等の責任は全て植田均にある。大方の叱正を賜れば幸いである。

Notes to *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Chapter 30.vol.3)

Ueda Hitoshi, Hu Yuhua, Shi Liangliang, Wang Shuyin, Zhong Lihua,
Zhang Enpei, Xu Mingyue, Zhang Qiuyun

Xingshi Yinyuan Zhuan is a full-length novel with 100 chapters, written in Shangdong dialect. Its writer is from Shangdong Province but his name and life story still remain unknown. We annotate the words/phrases the novel and include ‘comparison’ this time. Modern Chinese Research Class students from Kumamoto University are investigating all the words/phrases occurring in the representative works produced in northern mandarin area in Qing Dynasty and currently are working on all the words/phrases from *Xingshi Yinyuan Zhuan*. That is to say, the essay aims to expound ‘the rate of a certain word/phrase corresponding to its meaning’, and researches on the quantitative linguistics with figures counting frequencies.

Textual Research of *Xingshi Yinyuan Zhuan* from Hu Shi (1993) and Huang Suqiu (1981) contribute greatly to the annotation. Recently the Historical Evolution of the Dialect of *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Chao Rui, 2014) and Dialect Vocabulary Dictionary of *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Hitoshi Ueda, 2016) have been published one by one.